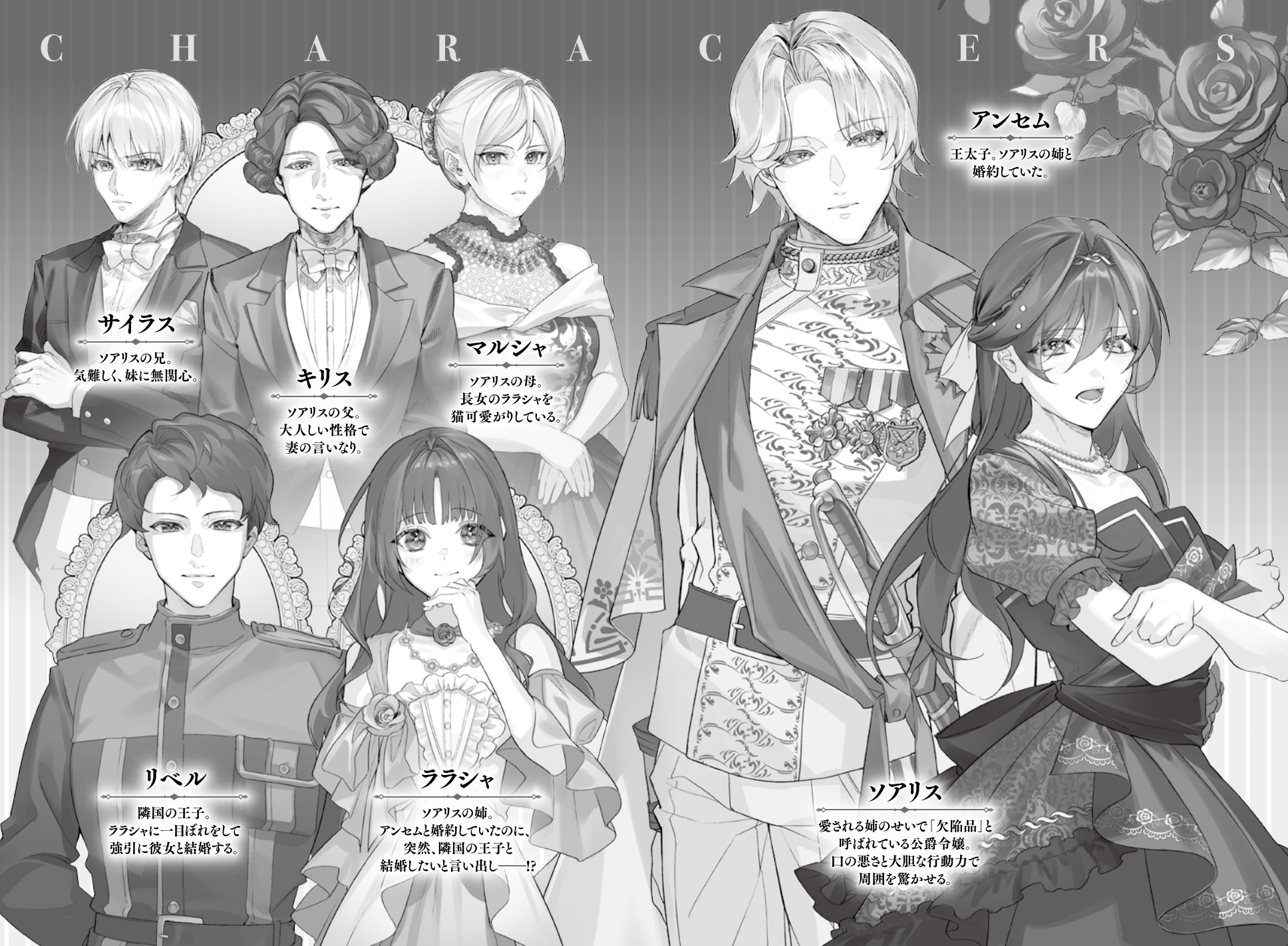
私のバラ色ではない人生

勝手な姉の身代わり結婚いたします

CHARACTERS


サイラス
ソアリスの兄。
気難しく、妹に無関心。
キリス
ソアリスの父。
大人しい性格で
妻の言いなり。
マルシャ
ソアリスの母。
長女のララシャを
猫可愛がりしている。
アンセム
王太子。ソアリスの姉と
婚約していた。
リベル
隣国の王子。
ララシャに一目ぼれをして
強引に彼女と結婚する。
ララシャ
ソアリスの姉。
アンセムと婚約していたのに、
突然、隣国の王子と
結婚したいと言い出し――!?
ソアリス
愛される姉のせいで「欠陥品」と
呼ばれている公爵令嬢。
口の悪さと大胆な行動力で
周囲を驚かせる。

迷惑な婚約解消

クロンデール王国の王太子の婚約者、ララシャ・ロアンスラー公爵令嬢が隣国であるピデム王国の第二王子・リベルに見染められて、その国に嫁ぐことになった。

ピデム王国はララシャの母の故国である。

ピデム王国の王家の血筋は他国と比べて好色家、唯一を囲う者が多いそうだが、傍から見ればなんだそれはとしか言いようがない。

リベルもそうだったようで、ララシャとの婚約を強引に進め、その様子に彼女が絆され、相思相愛となったらしい。そしてララシャの母がピデム王国との交渉のために実家に滞在することになる。

ララシャはクロンデール王国の王太子妃になるために育てられていた。

一方、彼女の妹・ソアリスはいつも姉のお供だった。

「ララシャ様の妹」、「王太子の婚約者の妹」――ソアリスは名前の前に常に自分ではない何かを付けられていた。

母にも事あるごとに比べられた。「さすがララシャは王太子妃ね。ソアリスはやっぱり姉には敵わないわね」と。

結局、ララシャは隣国の第二王子妃になるのだから、ある意味、母の言うことは間違っていなかったのだろう。さすが王太子妃になるべくして生まれた女性は違うと、ソアリスは思っていた。
しかし、彼女たちの父の発言で事態は一変する。
「ソアリスが王太子妃になるのだ」
昔は素敵だったと言われる父・キリスだが、年々貧相になっている。そんな人間からふざけた発言を聞くことになるとは、ソアリスは想像していなかった。
「絶対嫌です！　お父様は欠陥品の相応しくない私を、お姉様の代わりにするおつもりですか！」
ソアリスは良家の娘に似つかわしくないほど口が大変悪く、そのせいでロアンスラー公爵邸では欠陥品と呼ばれている。
「ララシャが嫁ぐことになったのだから仕方ないのだ」
「王家に仕方のない者を出すつもりで？　それって不敬ではないかしら？」
「そ、そんなことは」
「でも、お母様は私を欠陥品だとおっしゃいますし、お父様もそうおっしゃっていましたよね？」
「そういう仕方ないではなく、断れないのだ。姉と一緒に勉強してきたであろう」
姉のお供という名目で勉強には付き合ったが、王太子妃教育までは受けていない。
「ならば、私をこの家から切り捨ててください」
「出ていくと言うのか」
「ええ、そのほうがロアンスラー公爵家も清々しますでしょう？　問題が起きても関係ないと言えますよ」
「そんなに王太子殿下が嫌か」
「ええ、勿論です」
王太子はララシャに惚れこんでいる人。それを、妹が代わりなど耐えられないだろう。
姉と二人でいるところに何度か同席したが、ソアリスは毎回、空気と化した。
「姉ばかりずるいずるい」と文句を言う妹がいるそうだが、ソアリスはそう考えたことはない。ララシャは大変だなと思うばかりで、「私のほうが」なんて向上心はない。
言い寄ったなどと誤解されては堪らないので、王太子殿下の顔すらしっかり見たことがなかった。
「有り難く受け入れることであって、拒否権などない！　これは命令だ！」
「だったらお前が嫁げよ！」
口が達者ではない父はうるさいと叫んで、去っていった。
そこに、今回の騒動の元凶でもある母・マルシャが帰ってきた。そもそもララシャを隣国に連れていったのも、第二王子に会わせたのも彼女である。
ソアリスは全て母が悪いのではないかと思っていた。
それなのに、母もソアリスを責める。
「我儘ばっかり言って、キリスがボロボロじゃないの！　明日、王宮に行くわよ」
「お母様はお父様のことしか考えていないのね」
「キリスを傷付けたのはあなたでしょう」

「もういいです！　私は生まれなかったことにしてください。そうすればお父様が傷付くこともありませんわ」
　王太子妃などもってのほか。そもそもソアリスは貴族令嬢に向いていない。だからこそララシャより二歳年下の彼女には婚約者がいなかった。
　揉め事を起こさないためにも、いずれ、社交を必要としない爵位の低い貴族か平民に嫁ぐか、働こうと思っていたのだ。
　両親も全てはララシャが嫁いでから考えるつもりであった。
「何を言っているの！　ララシャが隣国に嫁ぐことになったのですから、あなたが代わりになるのは当たり前でしょう」
「どうして当たり前なのです？　それはお母様の考える当たり前でしょう？　何故、私がお母様の当たり前に従わなくてはならないのですか？　お姉様をわざと、リベル王子殿下と引き合わせたのでは？　なら、お前が全ての元凶だろうが！　わざとだったって言ってやろうか？」
「なんて言い方をするの！」
　マルシャがソアリスの頬を叩き、彼女は衝撃で壁に打ち付けられた。
　母はララシャには絶対に手を上げないが、自分の思い通りにならない言葉遣いの荒いソアリスは躊躇なく叩く。
「何事だ！」
　キリスが駆け込んでくる。

「生意気な口を利くものですから、つい」
「やりすぎだ」
「だって、私が悪いような言い方をするものですから」
　ソアリスは真っ赤になった頬を押さえ、口から血を流しながら体を起こした。
「事実を言っただけです。私が嫁いだら王家に迷惑を掛ける。なら、いないほうがいいでしょう？　私の言っていることの何がおかしいの？　お前らよりマシじゃないか？」
「迷惑を掛けないようにすればいいでしょう。手当てするから、こちらに来なさい」
「結構です！　あなたが叩いた跡を明日、皆に見ていただきましょう。虐待していると見られるでしょうね。ララシャにも影響がないといいですね」
　そう言って含みのある微笑みを向けたものの、ソアリスは王家へ告げ口をするつもりはない。そんなことを言って、王家で保護しますなんて言われたら困るからである。
　だが、脅しには使える。
「な、な、そんなことさせられないわ」
「でしたら明日、お断りしてきてください。いつも通り、欠陥品なので家から出すことにしたと言うのよ。簡単でしょう？」
「そんなことできるわけないでしょう！」
「ソアリス、手当てをしてもらいなさい。その顔では外に出られないよ」
「手を出したのはお母様でしょう？　いつも自分が正しいとは思わないことね」

「だったら部屋にずっといなさい！」
その日はそれで終わった。

翌日。
ソアリスは抵抗も虚しく、頬の青あざを化粧で隠し無理やり王宮に連れていかれることになった。
マルシャは娘を叩いたことをバラされたくないためなんとか歩み寄ろうとしたが、ソアリスは馬車の中で外を見たまま何も話さなかった。
それがまたマルシャの逆鱗に触れる。彼女は「余計なことを言うんじゃありませんよ」と怒鳴り付けた。親子関係は最悪な状態だ。
既に話が付いているようで、王宮では国王と王妃、王太子が待っていた。
「次女のソアリスです」
「ソアリス・ロアンスラーです」
ソアリスは静かにカーテシーを行う。
「何度か姉君と一緒に過ごしたことがあるな。改めてアンセム・グレンバレンだ」
「……はい」
「そういえば、無口だったな……」
アンセムはララシャと共にソアリスとも何度か一緒にお茶を飲んだことがある。だが、ソアリスは求められた時に相槌を打つだけで会話をした記憶がない。

「無口ではありません。余計なことを言うなと家族に言われておりますので、ご容赦ください」
「ソアリス！」
マルシャは今すぐ娘を咎めたかった。
だが、手を上げたことを言い出すのではないかと気が気ではない。証拠は化粧で隠しているだけなのだ。
「昨日、少し厳しくしたので、拗ねてしまいまして。申し訳ありません」
「ソアリス嬢は戸惑っておるのだろう。ララシャ嬢のことは残念ではあるが、これもまた運命なのかもしれないな」
国王がマルシャの言葉に鷹揚に頷く。
「有り難きお言葉でございます」
「アンセム、ソアリス嬢とよく話すといい」
「はい、よろしくお願いしますね、ソアリス嬢」
「……はい、よろしくお願いいたします」
愛想のない娘をマルシャは深く睨み付けることしかできない。一方、ソアリスは母を見ることすらなかった。結局、アンセムとソアリスの会話は弾むどころか、ほぼ無言だった。
「――なんてことをしてくれたの！　ララシャだったらこんなことには！　出来損ないなりにやりなさい」

「……」
「なんとか言いなさい。どうしてこんなことになったのよ」
帰りの馬車で、王太子との会話が弾まなかったことに落胆し、マルシャはソアリスを責め立てた。
そんな妻をキリスがなだめる。
「だが、ソアリスに頼るしかない」
「頼るだなんて、そんな言い方、必要ないわ。やるしかないのよ。もうなんでもいいから結婚すればいいわ。恥をかくのはこの子なのだから」
ロアンスラー公爵夫妻は揃って、この問題の責任をソアリスに押し付けることにした。

§

アンセムは以前、ララシャの話を聞いていただけなので、ソアリスとは何を話したらいいか分からない。ソアリスはアンセムと話すことがないため、やはり会話が成り立たない。
ソアリスはこの婚約が駄目になればいい、他の令嬢が婚約者になればいいと思っており、そもそも協力する気がないのだ。
結果、アンセムだけが困り果てることになった。
王太子の側近であるオーラン・バースランド侯爵令息とクイオ・リックソー伯爵令息はその様子を見て、アンセムと一緒に打開策を考えていた。

ララシャの情報はたくさんあるのだが、ソアリスは社交界の行事にほぼ欠席、学園での様子がかろうじて知られているくらいで、成績と親しい友人しか分からない。
好きなものも、好きなことも、調べられなかった。
ロアンスラー公爵家には嫡男であるサイラスがいるのだが、彼は気難しく、二人とは接点がない。ララシャも兄とはあまり話さないと言っていた。
「ソアリス嬢は、自分は無口なわけではないと言ったのですよね？」
「ああ、余計なことを言うから、と家族に止められているとか」
「何か口止めされていることがあるのではないですか？」
「ララシャのことか？」
「いえ、それは今さらないのではないでしょうか。リベル王子殿下は包み隠さず事情を話し、どうか譲ってほしいと、訴えたのでしょう？」
「そう聞いている」
リベル王子はララシャに一目惚れし、彼女以外とは結婚しないと宣言したそうだ。ピデム王国側は王太子妃を奪う代わりとして、慰謝料に加えてクロンデール王国に有利な輸出条件と不可侵条約を約束し、ある意味、クロンデールは得をしたと言える。
ただ問題は、王太子に婚約者がいなくなることであった。
そこで王家は相応しい令嬢を探したが、年頃の令嬢は既に婚約者がいるか結婚している者ばかり。ロアンスラー公爵家が責任をとって、ララシャと同じ教育を受けていたソアリスが後任となった。

婚約者が亡くなって、その兄弟姉妹が婚約を引き継ぐことは貴族社会ではよくあることだ。
「好きな人がいる、とかでしょうか？」
「ああ……それはあるかもしれぬな。それなのに担ぎ出されて、両親に口止めをされているのかもしれない」
「ですが……」
「言えぬだろうな……はあ、可哀想なことをしたな」
すっかりソアリスには好きな人がいてその人と結婚したかった、となってしまった。
アンセムは、婚約を覆すことはできない、歩み寄るしかないと腹を括って、次の茶会の時にソアリスに正直に話すように促した。
「怒ることはないから、なんでも話してほしい」
「不敬に問われることはありませんか」
「ああ」
やはり思うところがあるのだろうと、ソアリスの様子を見てアンセムは思う。どうにか落としどころを見付けなくてはならない。
「私には王太子妃は無理です。教養もありませんし、酷く口も悪いのです。粗相をする前に相応しい方に代わっていただくべきです」
「それはこれから学べば良いであろう、成績は良いと聞いている。口が悪いのは……公の場でなければ構わない」

「殿下はよろしいのですか？」
「ああ、私は構わない」
ソアリスは、アンセムはララシャのことを愛していたためにどうでもよくなったのだろうと考えた。
ララシャは言っていた。王太子の一挙手一投足が自分を愛していると言っている、と。
つまり、好きの反対は無関心、アンセムはララシャ以外の者がどう振る舞おうと気にならないのだ。ならば、最低限のことだけやってくれさえすればいいと、ソアリスは思うことにした。

§

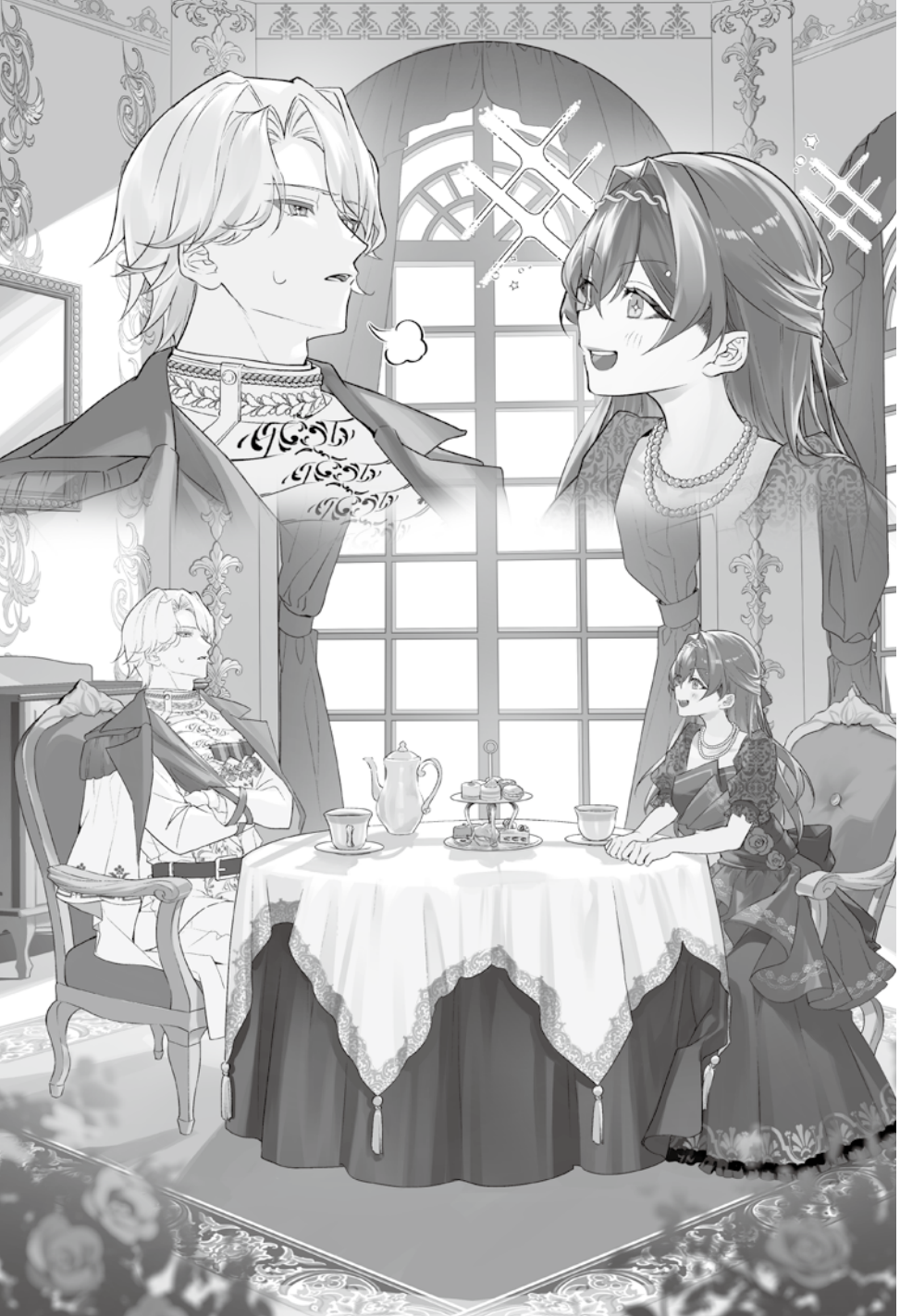
王宮から帰ると、母・マルシャから詰め寄られたが、ソアリスはやはり何も話さなかった。口を開いても開かなくても気に入らないなら、後者を選ぶ。
「王太子妃になることがあなたの幸せなの」
ソアリスは反応しないが、マルシャは自分の言葉が響いていないことに気づかずに続ける。
「黙っていてもいいわ、どうせ逃げられはしないのだから。ララシャみたいに王子様がやってこなくても、あなたはお姫様になれるのよ」
姉や幼児に言えば喜ぶかもしれないが、とソアリスは呆れるしかなかった。
「ララシャは素直な子だったのに。ララシャが二人いれば――」

次の日から、ソアリスは王宮に連れていかれて王太子妃教育を受けることになった。
勿論、本人にはやる気がない。むしろ、やるつもりもない。
「このようなことも分からないのですか。これでは間に合いませんわ」
「……」
「ララシャ様は優秀でも、妹は別ですわね」
教師は腕や太ももを打つなどの手荒なことをした上で、ソアリスは王太子妃に相応しくないと王家に進言した。
ソアリスはこの婚約から逃げられるかもしれないと思い、教師たちの態度の悪さを訴えなかった。
悲しくも、マルシャのせいでソアリスは躾と称する暴力に慣れていたのだ。
しかし王宮のメイドがソアリスの体に無数についた痣を発見してしまう。
教師はすぐに処罰された。教師ではなくマルシャがつけた痣も、教師のせいにされたようだ。
教師は子爵家の者で、王家に嫁ぐ家格ではないにも拘わらず、自分の娘を召し上げてもらおうと考えていたようだ。側妃であれば可能性はあるかもしれないが、王妃は無理だ。こうして、勝手に沈んでいった。
おかげで優しい教師、監視役が付けられて、ソアリスには逃げ場がなくなった。
何も悪くない者を無下にすることはできず、彼女は渋々授業を受けた。非がない者を責め立てる趣味は、彼女にはない。

そんなある日。
ララシャが結婚前に一度、帰国することになった。
両親が王太子との婚約を素直に受けるようソアリスを説得してほしいと頼むと、彼女は任せてと微笑んだ。ララシャは幼い頃から、ソアリスが自分に憧れていると思い込んでいる。
「ソアリスは王太子殿下が嫌なの？　優しい方なのよ？」
「でしたら、お姉様が戻ってあげたらいかがです？」
「それはできないわ、リベルが怒ってしまうもの。ふふふ」
「怒らせたらどうでしょう？　めちゃくちゃになればいい、そう思いませんか？」
その言葉に、ララシャは不思議な顔をした。
「あら、本当に嫌なのね。恥ずかしがって駄々をこねているのだと聞いていたのに。ソアリスには申し訳ないけど、私のように奪い合ってくれる王子様でも現れない限り、結婚させられるわよ。どうするの？」
「結婚するか、逃げるかしかないでしょう」
「逃げたら、お父様にもお母様にもお兄様にも迷惑が掛かるのよ」
「あの方々は大変優秀だそうですから、ご自身でどうにかするでしょう」
両親も兄もソアリスとは次元が合わないとまで言っている。ララシャのこともどうにかなったのだから、勝手にどうにかするだろう。
「逃げても、私は匿えないわよ」

「頼るつもりはありませんからご心配なく。誰も知らないところに参ります」
「危ないんじゃないの？　それより殿下に守っていただけばいいじゃない」
「守ってもらう？　死ぬほど嫌なところで生きながらえるのと、好きなところで嫌なことをするのはどちらも同じだと思いませんか？」
ララシャはいつものように人差し指を頬に当てて考えているようであった。
今はまだいいが、彼女は老いてもこの仕草を可愛いと思い込んだままやり続けるだろうと、ソアリスは思う。なるべく可愛らしいまま生きてほしいものだ。
「う～ん、私には分からないけれど」
「私はどちらも選ばないけれどの間違いでしょう？」
「だって私は愛されてしまったから、それをお返しするだけだわ。あなたも殿下に好きになってもらうように努力すればいいのよ」
ソアリスは愛される努力なんて微塵（みじん）も考えたことがない。さすが愛されている女性は考えが違うなと我が姉ながら感心する。
「お姉様は王太子殿下にとても好かれていたのでしょう？」
「ええ、リベルには敵わないけれど、とても愛されていたわ。だから私の代わりに可哀想な殿下を支えてあげてほしいのよ」
「私には無理ですわ」
「あなたは男性に愛されたことがないものね。私が二人いればいいんだけど」

「ええ、そうですね。お母様も同じことを言っていましたよ」
「私はどうしてなのか、愛されてしまうの。アンセム殿下も優しくて素敵だったけど、リベルに愛されて運命だと思ったわ。それで、いずれ子どもも生まれて、私は幸せな人生を送るの」
「幸せそうで何よりです。ところで、両国間ではどのような取引があったのですか？」
王太子の婚約者を奪ったのだから、クロンデール王国にかなり有利な約束がされているはずだ。ソアリスはそちらに興味があった。
「え？」
「王太子殿下の婚約者を奪うのですから、代償があるでしょう？　ご存知ないのですか」
「リベルとお父様とお母様がやってくれたから、私はよく知らないわ」
「え？　大丈夫ですか？　そこまでして欲したのですから、お姉様はかなり期待されていることになりますよ」
「大丈夫よ、期待にくらい応えられるわ。ソアリスは努力が足りないのよ」
「なんの努力です？」
「今まで通り、私を見てお手本にすればいいでしょう？」
姉を手本にしたことなどないのだが、どうしてかララシャはそう思い込んでいる。
そもそも髪の色は同じでも、父に似て華奢（きゃしゃ）なララシャと、昔の母に似てメリハリのある体のソアリスでは、パッと見はともかく、似ていない。
「最後にお会いできて良かったです。もう会うことはないと思いますが、お元気で」



「そんなこと言うものじゃないわ、あなたが王太子妃になれば会うことだってあるはずよ」
「ならず者になったら無理でしょう？」
「それはそうだけど」
「お幸せに」
ソアリスは姉を憎んではいなかったが、彼女とはまったく気が合わなかった。ものの取り合いにはならないけれど、話をするだけで疲れる。
姉は自分に都合の良い話ばかり、別の話題に変えてもすぐに自分の話に戻してしまう。
話していても何一つ面白くない人。それがソアリスにとってのララシャだ。
そんなことがあったものの、教師が代わったことでテキパキと王太子妃教育は進んでしまう。時折、アンセムとお茶をしたが、そちらは何も変わらなかった。
結婚すれば、側妃なり愛妾なりを作って上手くやるだろう。そうソアリスは考えることにする。
「やはり王太子妃にはなりたくないか？　正直に言っていい」
二回目のお茶会以来の質問だ。ソアリスはこれが最後のチャンスだと思った。
「はい」
「受け入れてやろうか？」
「よろしいのですか」
諦めつつあった彼女の瞳が酷く輝く。
「ああ、処罰は受けてもらうことになると思うが」

「勿論です、ありがとうございます。賢明なご判断、感謝いたします」
「ララシャのこともあるゆえ、重い罰となっても文句は言えぬぞ」
「はい、承知しております」
死にたくはない。国外追放でもいいから生き延びたいとは思っているが、王家に盾突く以上、そんなものはとっくに覚悟している。
自分は王太子妃には向いていない、いつか爆発する。
だが、死後の魂が虚空を浮遊し続けると言われている自害を選ぶ勇気はない。
王宮でも公爵邸でも監視されているから、これが本当に婚約を破綻させる最後のチャンスだ。
「そなたのせいで皆が死に追いやられてもか」
「どこまで対象になるのでしょうか」
「逃がす気か？」
「親戚や邸で働く者は関係ありません」
「それは通らぬ！」
アンセムはソアリスに好いた相手がいるのは可哀想だと思っていたが、腹を括った自分に対して、まだ逃げようとするのには苛立っていた。
王命とまではいかないが、それに近い結婚だ。
「親戚と邸の者はお許し願えませんか」
「家族は良いのか」

「優秀だそうですから、自分たちでどうにかするでしょう。私は覚悟ができておりますので」
ソアリスは幼い頃からララシャと比べられ続け、自分が貴族令嬢として劣っていると思い込んでいる。それをアンセムは理解していなかった。
何故なら、彼女の王太子妃教育はララシャよりも順調だったのだ。
そして、口が悪いことで家族に欠陥品扱いされていることも知らなかった。
「死ぬ覚悟か」
「はい、逃げようかとも思いましたが、監視が厳しくて、とうの昔に諦めました」
「処刑よりもか」
「死ぬことも考えましたが、自分の罪は自分で贖わなくてはなりませんから」

その日。
ソアリスは邸に帰ると自室に閉じ込められた。
結婚の日までこのまま過ごすように言われる。
殿下に処刑をにおわされたことが伝わり、家族が怯んだのだろう。
王太子妃になって粗相をしても同じことになるのに、とソアリスは笑った。
そもそもの始まりは両親のせいであった。
ロアンスラー公爵家はクロンデール国王の妹の嫁ぎ先筆頭だった。
ところが、嫡男のキリスに一目惚れしたピデム王国の侯爵家の娘、マルシャが求婚する。二人は

自分たちの婚姻を認めてもらうために、将来、王子に娘、王女に息子を差し出す約束をしたのだ。
王妹とキリスは恋仲ではなかったため、いざこざはなく、こうして王太子アンセムとララシャの婚約が決まったのだ。
マルシャはララシャを王太子妃にするために育てた。それを母国の者に奪われることになるとは、予想しなかった。自分のしたことが返ってきたのだ。
それでもソアリスがいると自分を奮い立たせて、両国を納得させたのだ。
ララシャは穏やかで大人しい性格だが、ソアリスはお転婆で口が達者、一歩下がって夫に仕える王太子妃には向かないのは分かっているが、なってもらうしかなかった。

不本意な結婚

部屋に閉じ込められたソアリスは、日に日に死に侵食されていった。
母の怒鳴り声と、兄の文句、父のたしなめているようでいない都合のいい言い訳――ソアリスは結婚式で心臓を切り裂いてしまおうかと考えたほどだ。
結婚式の日は眩しいほどの快晴だった。
両親も兄も作り笑顔で何か言っているが、ソアリスにその言葉は届かない。
「しっかり務めるんだぞ」
「ちゃんとしないと、自分に返ってくるのよ」
「相応しくなくても、やるしかないんだ」
親しくない者には姉のおこぼれ婚と揶揄されている。誰一人、この結婚を喜んでいるようには見えない。
この頃のソアリスの心はとっくに死を迎えていたと言っていい。叫びもがくような感情はなくなり、何も感じなくなっていた。目の前にあるものだけをこなせばいい。
あれほど豊富だった悪い口すら、開かれることはなくなっていた。
初夜は嬉々としたメイドに念入りに磨かれて寝室に放り込まれる。

処刑できなかった相手と結婚させられたのだ、アンセムは来ないだろう。
ソアリスは早々に眠った。
もっとも、アンセムは特にソアリスを嫌っているわけではないので、しきたり通り寝室に現れた。
「寝ているのか……」
さすがに起こしてまで行うことではないと、彼は初夜を諦める。
その後、ソアリスは自室で眠り始め、二人が閨を共にすることはなかった。

そんな日々が続いていたある日。
アンセムからソアリスに話があった。
「時期が過ぎたら側妃を迎え入れる」
「はい！　仰せのままに」
ソアリスは力強く答え、賢明な判断だと思った。すぐでは体裁が悪いかもしれないが、このままでは粗相を犯し自分が罰される可能性がある。
「王妃の仕事も場合によっては側妃に任せたいと思っている」
「勿論でございます」
「与えられたものだけやればいい、側妃については口出ししないでくれ」
「お心遣いありがとうございます」
クロンデール王国では、諍いを避けるために王太子妃と側妃は別の宮で暮らすことに決まっており、他国のように王太子妃と側妃が一緒に何かをすることはない。したがって、妃同士が顔を合わせることはほぼない。
おかげでソアリスは少し心が生き返り、与えられた公務を今まで以上に淡々とこなせるようになった。
そして一人になると、口汚い罵り言葉を吐き出した。
「消えちまえ、吹き出もの」、「くたばれ、鼻毛」、「呪われろ」。
名前を指定することはないので悪口を言われている相手が誰かは分からないし、ソアリスなりにストレスを発散させているのだ。
両親とララシャが手紙を送ってきたが、彼女は読まずに暖炉で燃やした。
自分には家族はいない。
実家でも王宮でも人々と適度な距離を保つ。欠陥品の自分が粗相をした時に一緒に処刑されては可哀想だからだ。
側妃の話があるまでは、彼女はいずれ病死できればいいなと考えていた。
公務以外で外部の者と会う機会はない。孤児院に熱心に通って病気の子の看病をしたが、病気と言えば熱が出るくらい。酷くなるようにこっそり水風呂に入ってもみたが、せいぜい五日くらいで回復してしまう。
そんなある日、また熱が出た。水風呂をどうしようかと考えていたところ、様子を診に来た医師が「おめでとうございます」と告げた。

――何故か妊娠していた。
初夜を済ませていないことが問題になり、これも側妃が来るまでの公務だと思って、ソアリスは何度か淡々とこなしたのだ。
そのせいでアンセムが一緒に眠るようになって、居心地が悪い。
「何故、一緒に眠る必要があるのでしょうか。ベッドの具合が悪いのですか？」
「嫌なのか？」
「ええ、不意に目を覚ました時に人の気配がすると殴り付けたくなるので」
「そ、そうか……」
妊娠が発覚して以来、同じ部屋で眠るものの、ベッドは二つに分けられた。
そして、公務は免除された。
代わりに、初めての悪阻というものに悩まされる。死ねないのに苦しいが、どうにか我慢できる。どうせ、死ぬわけじゃない。
どんどんお腹が膨れ、陣痛が始まり、男児が生まれた。
ソアリスは自身のことなのに、他人事のように感じていた。
息子は髪も瞳もアンセムに似ているらしい。乳母が育ててくれるようだ。欠陥品の自分が育てるわけにはいかないと思っていたので、有り難い。
第一子はユリウスと名付けられた。
両親と兄・サイラスがお祝いに訪れたようだ。

ソアリスはあのサイラスがどんな顔をしているのかだけには興味があったものの、話すことがないので会わなかった。アンセムは一度も公爵邸に帰らないソアリスに何かを察しているようで、何も言わなかった。
「まあ、王太子殿下によく似ているのね」
「本当だな」
サイラスはまだ結婚しておらず、ララシャにも子どもができていないため、ロアンスラー公爵家にとって初孫だ。
「ソアリスはどうしたのですか」
「まだ体調が万全でないようです」
対応することになったアンセムは「会っても話すことがない」と言っているなどとはさすがに言えず、誤魔化すしかない。
「何かあったのですか」
「まあ、いいじゃないか。疲れているのであろう」
「折角、労わってあげようと思ったのに」
「王太子妃にそんなこと言うもんじゃないよ」
「それでも私の娘なのよ」
サイラスは感想を述べることもなく、ただユリウスを見つめていたそうだ。

アンセムは子どもと出掛けようと誘うようになった。もっとも、ソアリスが無事のお帰りを祈っておりますと告げると、満足そうに去っていく。
欠陥品のソアリスが嫌がらせをすると思っているのか、結局、側妃の紹介は受けていない。ソアリスが断れば、その顔も知らない側妃が一緒に行くのだろう。
ソアリスは欠陥品。家族の輪を乱す存在は、仲良く一緒に出かけてはいけない。

半年後。
再び熱が出て水風呂チャンスが到来したが、今度も医師は「おめでとうございます」と告げた。
死ぬこともできないこの体はまた妊娠したのか、とソアリスは呆れる。
おかげで、また水風呂に入れなくなった。
悪阻、陣痛を経て、二人目の男児を出産。今度は髪の色はソアリスに似ているらしい。可哀想にと同情する。将来は毛染めをすすめるようにメイドにお願いしておいた。
第二子はマイノスと名付けられたそうだ。
ソアリスは、子どもたちとはすすめられたら遊ぶようにした。
そういえば、側妃の子は何歳で男女どちらなのだろうか。聞いたことがなかった彼女は、夕食の際にアンセムに聞いてみた。
「ご紹介は受けていませんが、側妃様の子はおいくつで男女どちらなのでしょう？」
「側妃？」

「ええ、側妃様もお子様も紹介してほしいなどとは申しません。ふと思いまして、聞いてみたかっただけなのですが」
アンセムが返事に窮した様子だったので、ソアリスはハッとした。
「失礼しました。私が口を出すことではありませんでした。申し訳ございません」
「あっ、ああ」
また両親と兄夫妻、ララシャとその夫・リベルがお祝いに訪れたらしいが、ソアリスはまたも面会を断った。手紙を渡されたが、火を付けて暖炉に投げた。
兄も結婚したが、まだ子はおらず、二人目の孫の誕生となったそうだ。
第一子同様、アンセムだけが対応する。
「可愛いわ、髪がソアリスの色ね」
「私の色でもあるわ」
ララシャは自分と同じ髪色に感激していたそうだ。
「そうね」
「ソアリスはまた顔を見せないの？」
「ええ、会うことはないと言っています」
「嫌がられる覚えはないのだけど」
「要領が悪いから疲れているんだよ」
「そうね」

ソアリスがその場にいたならば、おめでたい頭をしていると言っただろう。

しばらくして、マイノス生誕の祝いのパーティーが開かれることになった。

ユリウスの時もあったらしいが、マイノスを妊娠したためにソアリスは欠席と、周囲がしておいてくれたらしい。

今回は出席するように言われたものの、醜聞になってはまずいと水風呂チャレンジを行う。みごとに前日に熱が出た。使えない体が初めて役に立ってくれた。おかげでパーティーを欠席できる。

ソアリスは騒がしい王宮内でゆっくりと眠れる喜びを噛みしめた。

ユリウスとマイノスとは、母と子というより、子ども同士のように遊ぶようになった。

そして二人が三歳と二歳になる頃、ソアリスはまた妊娠した。

今度は初めての女の子だ。

結局、ソアリスは立て続けに産み続けている。

髪色こそアンセムの色だったが、娘はソアリスによく似た子だった。可哀想にと、お化粧をする年頃になったら念入りにしてあげて、とまたしてもメイドにお願いした。

第三子はアリルと名付けられ、皆に愛されているという。

§

そんなある日。

「――リベル王子が兄君の息子と私の娘をいずれ結婚させたいと言っている。ソアリスはどう思う？」

そう、アンセムはソアリスに聞いた。

リベル第二王子とララシャにはまだ子どもがいない。

リベルは側妃をすすめられたが娶ることはなかった。

幸い、王太子夫妻に男児が生まれたので、これはララシャの負担を軽減するための申し出だそうだ。ソアリスの産んだ子であれば血の繋がりもあり、国のためにもなる。

「殿下の仰せのままに」

「意見はないのか？」

「殿下のお子様ではありませんか」

「そなたの子でもあろう」

「そうなのですか？」

「正直に言ってくれていい」

「頭がおかしいとしか言いようがありません、蛆でも湧いているんじゃないですか」

「……そこまでか」

ソアリスの口の悪さは変わらなかった。

彼女の部屋から「死ね！」「あんの、じじい！　禿げあがっているくせに。残りをむしり取って

やろうか」などという声がするのを、アンセムも聞いていた。
使用人には、どうか聞き流してやってほしいと頼んである。
ただ、リベルの訪問を受けたアンセムは、彼の必死さを感じていた。
やってきたリベルとの会話はこんな感じだった。
「正式な婚約を結ぼうというわけではない。そうなったらいいなくらいでも駄目か」
「子の未来を勝手に決めることはしたくないのです」
「ララシャのためにお願いできぬか、ソアリス妃によく似た子だと聞いている」
子ができぬことはつらいだろうとは思うが、リベルは獰猛にアリルを奪おうとしているように感じる。
「まさか承諾させて、早くにそちらで教育をなどとお思いではないですよね？」
「いや、それもいいかと思っている。早くに馴染んだほうが良いであろう、伯母であるララシャもいるわけだし」
「まだ一歳ですよ。母でもないララシャ妃に何ができるというのです？」
ララシャにアリルを与えようとしているとしか思えない。
子どもは物ではない。
「アンセム殿には他に二人もお子がいるではないですか」
「一人くらいとおっしゃるのですか？　逆の立場だったらどうですか？」
「無論、逆ならば私は喜んで承諾すると思う」

それは子どもがいないから言えるのだろう。逆だったら、渡さないと思われる。
「私はそうは思いません。ソアリスも反対しておりますのでララシャ妃にもそうお伝えください」
「どうして妹君が反対などと⁉　ララシャが望んでおるのだぞ！」
まるで希望が通ることが当たり前のような口振りに、アンセムは苛立ちが抑えきれなくなった。
「とにかく私も反対、妻も反対です。ロアンスラー公爵家にも娘が生まれたそうじゃないですか、そちらに頼んではいかがですか」
「既に会わせたが、兄君の奥方に似ていて、ララシャが望まぬのだ……」
ようやくロアンスラー公爵家の嫡男、サイラスにも娘が生まれていた。
とはいえ、望む望まないの話ではない。さすがのサイラスも娘をララシャに渡すという選択をするとは思えなかった。
「はあ……アリルが大きくなって、あの子が望んでという以外は認められません」
「では、まず会わせてもらえないか」
「話を聞いておられますか？　大きくなってと申し上げたはずです」
「ララシャにもルイスにも会わせたいのだ」
「大きくなってからの話です、お引き取りください」
「姪が来ればララシャが喜ぶのだ、どうかお願いだ」
リベルは頭を下げたが、そこまで言うのならという話ではない。
「いい加減にしてください、あなた方は自分たちのことしか考えていない。ましてや、あなたは前

科のある身で」
「それはもう過去のことだろう」
「これ以上は国の問題にさせていただきますよ。婚約者を奪い、今度はソアリスが命を懸けて産んだ子を、そちらの勝手で奪おうとしていると」
「そっ、それは困る」
「今後、この話はやめてください」
リベルは肩を落として帰っていった。おそらくララシャに話を纏めてくると受け合って、意気揚々とやってきたのであろう。

国に戻ったリベルを、ララシャは嬉々として迎えた。
「どうだった？」
「ああ、考えてくれるそうだよ」
「本当に？　娘はいつこちらに来るかしら？」
彼女はすっかりアリルが自分の娘になると信じて疑わなかった。
「大きくなってから本人が望めばと言われたよ」
「それじゃ駄目よ、ソアリスに早く連れてくるように言ってちょうだい。私が母親になるから大丈夫よって」
「まだ幼いから、奪うような真似はできないよ」

「あなたは私を奪ったではありませんか！　また同じようにすればいいのよ。ソアリスに似ているなら私にも似ているから、きっと本物よりも素敵な親子になれるわ。ソアリスも喜んで差し出すはずよ」
第二王子妃とはいえ、周りに子はまだかと言われ、周囲は当たり前に子が生まれている状況。
リベルは「私は子はおらずともララシャがいればいい」と伝えることしかできず、離縁や側妃について考えたことは、お互いにない。
兄の王太子が結婚し、男児が生まれると安堵したのも事実。おかげでララシャに対するプレッシャーはしばらく薄まったが、子を望まないということではない。彼女の実家であるロアンスラー公爵家にも相談していた。
公爵夫妻には子は授かりものだから二人が幸せならいいじゃないかと励まされた。
ララシャの兄に女児が生まれるとすぐ妻を連れて会いに行ったが、公爵家の者には全く似ておらず、彼女はあからさまに興味を示さなかった。
そこへソアリスが女児を産み、彼女に似ているという情報を得たのだ。
ララシャは、王太子の子・ルイスの妻にしよう、早くに会わせたほうがいいからこちらに来てもらって自分が面倒を見ると言い出した。リベルも悪い話ではないと思った。
兄も良き掛け橋になるだろうと言ってくれた。
アンセム王太子には他にも子がおり、妃はララシャのことが大好きだと聞いている。だから、問題なく応じると思った。ララシャにはできることはなんでもしてやりたい。

それなのに――
「無理強いはできない。結婚のことは追々として、もう少し大きくなったら、二人で会いに行ってみようか」
「……ええ、そうね。ソアリスに会いに行くと伝えてくれる？　あの子も私に会いたいはずよ」
「ああ、勿論だよ」
リベルはララシャの言うことを信じているため、ソアリスがララシャに会いたいなどと思っていないことを、知らない。
そして、時間が経ってということのはずが、すぐに会いに行くことになった。

数日後。
リベルとララシャがクロンデール王国の王宮を訪ねてきた。
アンセムが対応に出る。
「ご訪問ありがとうございます」
「ソアリスはどこかしら？」
ララシャが部屋をキョロキョロと見渡したが、ソアリスの姿はない。
「ソアリスは公務に出ております」
「ララシャが会いたがっているから、時間を取ってもらように伝えたはずだが」
「公務があるため難しいと返事をしたはずですが？」

「それはそうだが……」
クロンデール王国側は既に、公務を優先するので私的な理由で時間は取れないと、正式に返事をしていた。ソアリスは姉に会いたくないと、わざわざ外出する公務に出ている。
「じゃあ、娘は？」
「アリルのことですか」
「ええ、いずれ私の子になるのですから」
「ララシャ、そのことは……」
「リベル殿下、子どものことは、国の問題にすると申し上げたはずです」
「ああ、勿論、分かっている。ちょっと気が急いてしまったのだよ。ララシャ、今日は会うだけという約束だっただろう」
「でも、ソアリスなら分かってくれるわ。私の子になるのよ、喜ぶはずよ」
ララシャはいまだにアリルを手元に置くことを諦めていない。そもそも養子にするという話ではなかったのに、勝手に娘になるとまで口にしていた。
「さっきから何をおっしゃっているのですか」
「ソアリスなら自分より優秀な私に託すと言うはずよ！」
「ソアリスが？　ありえませんよ。姉は万事滞りなく幸せだと言っていたから、私のおこぼれをもらうような恥ずかしい真似は絶対にしないだろうと申しておりました」
「なっ、そんなこと」

ララシャは真っ赤になった。
「リベル殿下、これ以上は問題になりますよ」
アンセムはソアリスに、リベルはアリルを預かるのは当たり前と言わんばかりの様子だったと、話していた。
『リベル殿はアリルを奪い取る気かもしれない』
『そうですか』
『なんとも思わないのか！』
『王子ではなく、誘拐王のほうがお似合いなのでは？　そう背中に刺繍してさしあげたらいかがでしょうか』
『そ、そうだな』
ソアリスの素っ気ない態度につい怒ることが何度かあったが、その度に言い合いにはならず、彼女がバツンと切るような強い口撃をすることに、さすがのアンセムも気づいていた。
『最後に会った姉は、自分は愛されている、万事滞りなく幸せだと申しておりましたので、私のおこぼれを拾うような恥ずかしい真似はできないでしょう。あれは、いつも周りが是非と献上するのを待っているのですよ』
『子ができぬと嘆いておるらしいが』
『それはどうにかなるものではないかもしれませんが、そんなに欲しいなら自分が産まずとも、側妃に産んでもらえばいいじゃないですか。それで出来ないなら相手に問題があるのでしょう』

『そ、その通りだな』
王家に嫁いだ以上、避けては通れない道だ。それはララシャも分かっているはずだった。
そこに従者とメイドが小さなお姫様を連れて入ってきた。
お姫様――アリルはアンセムを見付けると、ぴょんと抱きつく。アンセムは会わせたくなかったのだが、ソアリスが会いたいなら会わせればいいと言い切ったのだ。
「おとうしゃま」
「アリル、こちらはお母様のお姉さんと旦那さんだよ」
「はじめまちて、アリル・グレンバレンでしゅ」
アリルはアンセムに抱かれたままハキハキと挨拶をした。
「まあ、本当にソアリスにそっくりね」
「本当だ、ララシャにも似ている」
襲い掛かりそうな雰囲気こそなかったが、二人は目を爛々とさせてアリルを見た。ララシャにいたっては見付けたと言わんばかりの顔だ。
「ちょんなにみられたら、こわい」
アリルはアンセムに力強く抱きつき、怯えた目を二人に向ける。
「ごめんなさいね。あまりに可愛いから、見つめてしまったのよ」
「そうでしゅか」
「抱っこさせてくれない？」

「やです、おとうしゃまがいい」
「そ、そう……」
ララシャは断られるとは全く思っておらず、どうすることもできなかった。この場に、「是非抱いてやってください」と言う人もいない。
「アリル王女、妻に抱かせてはもらえないか」
「やーよ、おかあしゃまは？」
アリルは人見知りではないのだが、目の前の二人に全く興味がない。
「お外でお仕事だよ」
「えええ！　あしょんでほしかったのに。おかあしゃまとあそぶのがいちばんたのちいのよ」
「そうだな、戻って元気だったら遊んでもらおう」
ソアリスは子どもにベッタリということはないものの、遊ぶ時はどろんこになるくらいの気合を見せるので、子どもたちは母親が大好きだ。アンセムも息子二人と木登りをする妻の姿をかっこいいと思っていた。
「おとうしゃまもおねがいちてくれる？」
「いいよ」
「やったぁ！」
父娘で楽しく会話が弾む一方で、ララシャはアリルを自分に懐かせたい、こちらが主導権を握らなくてはならない、と思った。

「アリル王女はお母様に似ているわね」
「よくいわれましゅ。うれしいね、おとうしゃま」
アリルはアンセムに同意を促すように、にっこり笑った。
「私はお母様のお姉様だから、私にも似てるでしょう？」
「おとうしゃま、このおばににてる？」
「……おば」
ララシャは〝おば〟発言にショックを受けたようだった。
伯母には違いないが、アリルの〝おば〟は不特定多数のおばさんの意味である。そう呼ばれた経験がないのであろう。ソアリスと二歳しか違わないのだが、アリルにとって母以外の年上の女性は〝おば〟なのだ。
「どうかな？　アリルはお母様に似ているから、お父様はそう思わないけど」
「うん、わたちもそうおもう。おば、にてないよ。まちがいだよ。はずかちいね」
くふふふと、無邪気な満面の笑みにララシャは打ち砕かれた。
アリルはソアリスに似ていることを誇りに思っているのだ。
風貌(ふうぼう)もだが、口ぶりも母親にそっくりだ。おばさまではなく、おば発言もおそらく、非公式な場でソアリスがそう言っていたのだろう。
正確には「あんの、ばばあ」だと思う。むしろ〝おば〟でもマシなほうだと思うべきである。
前にソアリスが「鞭打(むちう)ちにしてやろうか」と口走ってユリウスとマイノスの間で流行となり、ア

ンセムが困ったことがあった。
ソアリスは「口が悪いのは分かっていたことでしょう」と開き直ったが、子どもの前では気をつけますと反省して、以来、子どもたちの前では絶対に使わない。
だが、耳に入ることはある。
結局、アリルが全く懐かず、悪意のない〝おば〟発言でララシャの情熱が冷めたのか、二人はまた来ると言って帰った。

それでも、ララシャはどうしてもアリルを欲しいと思った。正攻法では連れ帰れなかったので、両親に泣きつく。
「アリルをルイス殿下の妻にするために、傍(そば)に置きたいの」
「それはいい考えね」
マルシャはいつまで経ってもララシャに子どもができないことに気を揉んでいたので、娘の意見に賛同した。
「でしょう？　なのにアンセム様は国の問題にするって脅(おど)すのよ。だからソアリスを説得してほしいの」
「私たちもソアリスには会えないのよ、手紙にも返事がなくてね……」
「どうして？」
「今は公式の場で挨拶するくらいなの」

何か困っていることはないか、たまにはロアンスラー公爵家に遊びに来たらいいと文を出しているが、一度も返事はない。
「昔みたいに言うことを聞かせればいいじゃない！　お母様、得意でしょう？」
「相手は王太子妃なのよ、もう簡単にはいかないわ」
「私に子どもが出来ればいいけど、出来ないんだもの。一人くらい良いじゃない」
それを言われると、誰も何も言えなかった。
実はソアリスは第四子を妊娠しているのだが、アンセムはあえて二人には言わなかった。
「ソアリスは口が悪いでしょう、アリルが私のことをおばって言ったのよ」
「まあ！　でも伯母なのだから」
「そういえば私もじいさんと言われたな」
キリスがぼそりと呟(つぶや)いた。
「おじい様と言うべきでしょう！　ソアリスが育てているから駄目なのよ」
「でもユリウスとマイノスは、もうロアンスラー公爵としか呼んでくれぬからな」
「お母様はなんて呼ばれたの？　ばあさん？」
「それは言うな」
あの天使のような顔でばあさんと呼ばれる衝撃は、さぞ堪(こた)えるだろう。
「ソアリスと話せれば、絶対に従うと思うのよ。あの子は私に憧れているから」
「でもソアリスの一存では無理でしょう」

「そうだな。王家でなければ、養子にすると言ったら通るだろうが、公爵家にどうにかできる話ではない」
王子の婚約者にするにしても、他国の王家の子どもをいくら姉妹だからといって「はい、どうぞ」ということは難しい。
「ソアリスが是非にと言えばいいことじゃない？」
「ああ、ララシャが育ててくれるなんて聞いたら、喜ぶんじゃないか」
リベルはララシャから聞くソアリスしか知らないため、妻の意見に賛同する。
「そうよ、なのに殿下が邪魔するから」
「仕方ない、殿下の子なのだから」
結局、ロアンスラー公爵家でもなんともできず、リベルとララシャは仕方なく国に戻った。
リベルは妻であるララシャが全てだ。なんでも叶えてやりたいが、子どもはどうにもならない。ちょうど王太子である兄・カリルから、ソアリスの第四子妊娠の情報を聞いたところだ。
「また妊娠とは……ララシャが気にするだろうな」
「割り切って側妃か愛妾を考えてはどうだ？」
「そんなことをしたら、ララシャは耐えられぬだろう」
元々、ララシャは隣国の王太子妃になる予定だったので、王家の事情は分かっていると思っていた。なのに、リベルが側妃も愛妾も娶らないと約束したことにこだわり続けている。
「妹君の子を欲しがってるようだが、本当はお前の子が欲しいんだろう？　他の者に産んでもらうか、諦めるか、話したらどうだ？　側妃の話が出たら態度を改めるかもしれんぞ、最近の彼女は目に余るものがあるしな」
兄の言うことはもっともだった。彼女はルイスに「将来、私の娘になる」とアリルを押し売りしている。
結局、ララシャに注意することになった。
「ララシャ、ルイスにアリル王女をすすめるのは止めてほしい」
「どうして？」
「兄上が困っているそうだ」
「どうしてよ！」
「私の娘だと言っているだろう？」
「だってそうじゃない！」
「アリル王女はソアリス王太子妃の娘なんだよ。そう触れ回ったせいで、君が懐妊したと誤解した者がいるのだ」
「そんな、つもりは――」
考えが及ばないララシャは、娘と仲良くしてあげてねなどと母親気分で触れ回り、第二王子妃が妊娠したと勘違いした者が多く出たのだ。
「君が傷付くことになったら堪らない、だから誤解を招かないように控えてほしい」
「分かったわ」

「ありがとう。――ところで、ソアリス妃は四人目を懐妊したそうだよ」
「……えっ、嘘……」
「おめでたいことだ、祝おうじゃないか。私はララシャがいるだけで幸せなんだから、互いの幸せを祝うべきじゃないか」
「……そうね」
ララシャは明らかに沈んだ顔をしたが、すぐに嬉々とした顔に変わった。
「待って！　いいこと思いついたわ！　私も妊娠したことにして、ソアリスの子を貰えばいいんじゃない？　ソアリスの子は死んだことにして」
「そんなことできるわけないだろう！　なんて恐ろしいことを言うんだ！」
「そのくらい良いじゃない……」
「それはできない！」
いくらララシャのためでも、さすがのリベルもそんなことはできない。それこそ問題になる。
「幸せのためには、子どもが欲しいのよ！」
ララシャは勿論、自分の子が欲しかった。
王子妃だからではなく、皆が持っているから欲しいのだ。
だが、周りの妊婦を見て怖くなってもいた。
元々好き嫌いが多いのにものを食べられなくなり、着たいものを着られなくなり、そして出産で死ぬ者がいることも知った。

細い体は体力を付けないと危ないと言われたこともある。けれど、彼女は細いと言われることが誇りだ。それが太ることに積極的になれない理由である。
子どもができなくても、リベルが周りに気をつけるように言っており、直接責められることはない。彼が側妃を迎えたいなどとは絶対に言わないことも分かっていた。
でも自分によく似た可愛らしい娘と「姉妹のようね」と言われ、二人で着飾ってみたいという夢は持っている。
そんな時、自分が産まずとも都合のいいアリルが見つかったのだ。
「だったら養子を貰おう」
「駄目よ、血が繋がってないじゃない」
「私の遠縁から貰い受ければいい」
「私とは血が繋がってないわ」
「ソアリス妃の子なら、私もそうじゃないか」
「そっ、それはそうだけど……ソアリスはこれで四人も子どもがいるのよ！　おかしいじゃない！　そうでしょう？　姉妹なのよ？」
すぐに子どもが出来れば違ったのだろうが、ララシャは愛されることは好きだが、閨が特別好きなわけではない。時期を決めず気分で行っており、回数は少ない。
リベルは妻が嫌がることはしたくなかったので、子どものためにタイミングを調整して回数を増やそうとは言えずにいた。

「落ち着いて話そう。私は子どもが生まれたら嬉しいが、それよりもララシャがいればいいんだ」
「私は子どもが欲しいの！　優しい夫と、可愛い娘が欲しいの！　私は全て持っていたいのよ。どうして子どもが出来ないのよ……」
「じゃあ、指導してもらおう」
「指導？」
「そうだ、子どもが出来やすいように指導してもらうんだ」
ララシャにもいずれ出来ると思っていたので、医師に診てもらうことではないと、リベルは遠慮していた。そうしているうちに、年々過敏になってしまい、すすめにくくなっていたのだ。
リベル自身は診察を受け、問題ないと診断されている。
ララシャが痩せすぎているのが懸念点であることだけは聞いていたので密かに食事量を増やしているが、好き嫌いが多くあまり成果が出ていない。
「そんなことしたくないわ。お願いよ、アンセム殿下とソアリスに頼んでちょうだい。私を大事に想っている二人なら叶えてくれるわ」
ララシャは、アンセムは泣く泣く別れただけで今でも自分を好いている、妹は憧れの私の希望には必ず応える、と信じて疑っていない。
「無理だよ、アンセム殿下に断られただろう？」
「じゃあ、もう死んでやるわ！」
「何？　何を、言ってるんだ？　死ぬなんて簡単に言うもんじゃない」

「私は本気よ、私の幸せのためなのよ、どうして叶えてくれないの……私を幸せにするって言ったのは嘘だったの？　あなたは嘘つきよ！」
ララシャはアリルが手に入るまで部屋から出ないと言って、自室に閉じ籠ってしまった。
リベルは周りの者に世話を頼み、アンセムと話をしてくると、またクロンデール王国に向かうことになった。

リベルの再来訪を告げる文を貰ったアンセムは、暇なのかと一瞬、隣国の正気を疑った。
ララシャがいないので、今度はソアリスも同席することになる。リベルとソアリスが会うのは結婚式以来だ。
「助けてほしい、何かいい案はないかという相談に来させてもらった。私は子どもを奪おうなんて考えていない」
「はあ……」
「実はララシャがアリル王女は自分の娘になると触れ回り、周囲に妊娠したと思われてしまったんだ……控えるように言ったら、今度は妊娠を偽装してソアリス妃の産んだ子を貰うと言い出して――」
「は？」
なんだそれは、とアンセムは怒りで眉をひそめた。そもそも婚約者を奪った相手が、その妻の相談をすること自体をおかしいと思わないのか？

立ち読みサンプルはここまで

ソアリスは表情を変えずにリベルの話を聞いていたが、頭の中では、やっぱり誘拐王と刺繍すればいいのにと考えていた。

「ならば養子を貰おうと言ったら、その子は自分との血縁がないから嫌だと言い出して……」

「相変わらず滅茶苦茶ですわね、アリルがそんなに可愛かったのかしら？　あまり可愛い子すぎると、良くないのかも」

「ソアリス？」

アンセムはブツブツ言い出したソアリスに声を掛けたが、彼女は何やら考え込んでいる。やがて、考えが纏まったような顔をして口を開いた。

「リベル殿下、素直な意見を言ってもよろしいですか？」

「あっ、ああ」

「ララシャ妃にとって子どもは、人形感覚なのではありませんか？　それがたまたまアリルだっただけで、気に入る子を与えてもその子が思い通りにならなければ、ララシャ妃はこう言いますよ。私の子じゃないからと……」

「……ないとは言えないな」

アンセムも口には出さなかったが、的を射ていると思った。

「だが……死んでやると部屋に籠ってしまったんだよ。だからと言って、アリル王女をくれなんて言うつもりはない。ララシャがおかしいことも分かっている」

「それで相談ですか？　放っておけばよろしいのでは？　いずれ私が感情的になっていたわ、と

謝ってきますよ」

「それでは解決しないだろう」

「率直に伺いますが、子が出来ないのはララシャ妃に問題があるのですか？」

ここまで来たら尋ねてもいいだろうと、アンセムは思い切って聞くことにした。

「……分からないんだ、私は問題ないと言われている。ララシャに検査をすすめたこともあるのだが、受けたくないと、そのままになっている。今、ララシャに問題があると言われたら、立ち直れるか分からないだろう？　どんどん酷くなっていて……」

確かに、今のような状態の時に子どもは難しいと言われたら、ますます酷くなるだろう。

だが、子どもが欲しいならば、診察を受けたほうがいい。

「側妃は娶らないのですか」

「娶らない、ララシャにもそう伝えている」

「求婚の時にそう言ったからではありませんか？」

「あっ、ああ……」

ララシャは自分だけを愛してくれると信じてリベルを選んだのだろう。クロンデール王国では側妃を娶られる可能性があるだろうから、リベルのほうがいいと考えたに違いない。

母・マルシャもそうであるからこそ、娘の願いを聞いたに違いない。

リベルは厄介な人に惚れてくれたものだ。それならば自分で責任を取れ、とソアリスは怒鳴り付けたかったが、グッと堪える。